

【新陰流「転(まろばし)の解析 まっすぐ一拍子に太刀を出す】 渡辺 忠成

世に「秘剣○○○」とか「秘技○○」とかいわれるものが存在するようであるが、新陰流にはその「○○○」といったものは存在しない。「転(まろばし)」は新陰流にとって最高最大の極意である。しかし、特別に「これが極意“転”である」といった、いわゆる秘剣として存在するのではなく、新陰流の刀法すべてが、新陰流の心法を含めて、新陰流そのものが“転”なのである。新陰流の祖、上泉伊勢守の全人格、全生命、哲学すべてがこの“転”といえるから、新陰流＝転流といっても言いすぎではない。新陰流にとっては、これほど重要な事項であり、無刀取り以下諸もろの技は、この転に比較すれば、すべてその一端の枝葉にすぎないのである。

しかしながら、流祖、上泉伊勢守の哲理である「転」はあまりにも世に理解されないばかりでなく、新陰流一流の者にも真に理解されることなく、通り一遍のうわべの理解に終始されているくらいがある。私の研究の段階でも、この転をよく理解していたと思われる人物は、この四百数十年にわたって三、四名を数えるのみである。「転」とはそれほど漠然としたものなのであろうか。理解に苦しむ。

「陰流によって悟る」

新陰流＝転であると前に述べたが、それでは、上泉伊勢守は、いつごろに“転”の発想をしたのかというと、陰流の“猿飛(えんぴ)”を学んだあとということが結論である。上泉伊勢守は幼少より各流の刀槍の術を学び研鑽したと伝えられており、流祖自らが念流、神道流、陰流を学んだと著しており、そのほかは数に足らずといっている。その中で愛洲移香齋を流祖とする陰流を学んだのは、上泉伊勢守三十歳ごろと推定される。上泉伊勢守が新陰流を宣揚したのが三十五歳前後といわれているので、その新陰流の原点である“転”については、陰流を学んでから新陰流を宣するまでの間ということになる。

それでは、陰流を学んで何がゆえに“転”を悟ったのか。陰流の“猿飛”の二本目に猿廻(えんかい)という術がある(新陰流の“燕飛”の場合も猿廻は二本目である)。極意を悟るということは、禅の悟りと同じで、その動機はいろいろであり、人によりそれぞれ異なるわけであるが、上泉伊勢守は、そのなかで、猿廻によって剣の至妙を心悟したと伝えられている。では猿廻とはどのような術かということ、非常に困難なことを苦にもせず、すらすらと自然に、流れるごとく身体のさばきで行ずる術であり、よく修行すれば、これほどすばらしい術はないと納得できる術であり、上泉伊勢守がこの術で剣の悟を開いたということはもともとであると納得できる。そして、この“転”は上泉伊勢守門下にも当然伝えられた。言葉こそ異なっているが、タイ捨流の「十手詰」までと、直心影流の「丸橋」など“転”“のことである。

「自在に転化変転す」

さて、剣には術理と心法があり、車の両輪のごとく剣法を学ぼうえに重大な二大要素といわれているが、多くはそれぞれ別の物であり、それぞれ異なった言葉で解説されることがほとんどである。しかし、新陰流においては、たった一言“転”のみで双方に通じる重みと深みがある。太刀使用上の転については後術することにして、心法、哲学面における転について述べてみたいと思う。が、その前に、上泉伊勢守著の「転」論掲げておこう。

且つ又懸待表裏は一隅を守らず。敵に随って轉變して一重の手段を施すこと恰(あたか)も風を見て帆を使ひ、兎を見て鷹を放つが如し。懸を以て懸と為し、待を以て待を為すは常のことなり。懸、懸に非ず、待、待に非ず、懸は意待に在り、待は意懸に在り。牡丹花下の睡猫児、学ぶ者此句を透得して識る可し。(原文漢文)

上泉伊勢守はおのれの哲学をこのように表現している。文章を読んですぐ感じると思うが、この表現そのものが禅書の文章とまったく同じだということである。上泉伊勢守は剣を学ぶとともに禅をよくした人なのでその思想、表現は禅的であり、また、自己発明のものについては、すべて禅語を用いてある。

たとえば、転の具視として考案した「参学円之太刀」は、参学その語から禅語であり、その内容の一刀両段、斬釘截鉄、半開半向、右旋左転、長短一味など、すべてが禅語である。同じように“転”も禅語そのものであり「変動無常因敵転下す」より出た語である。その意味は、敵の仕懸(しか)けは千変万化であり定りが無い。よって我は敵に因って転化し勝ちを利するということである。その転化する勢いは、丸い石を高い所から低い谷間に転ずるがごとく滞りなく、また、防ぐことができない勢いで。そのような勢いを意(こころ)に秘め、敵のはたらきを心眼にてよく分別し、刀身一致して心の動きに従って自由自在に転化変転すること、すなわち勝負の道の妙諦であり、「転」そのものである。

「転勝ちの本体」

それでは、新陰流における太刀としての「転」について述べてみよう。太刀名として「小転」「大転」の太刀名があり、転の象徴として伝授される。前にも述べたように、小転、大転に限らず、新陰流の太刀すべてが転の哲理のもとに構成、完成されているわけである。具体的にどのような術かという、敵の攻撃に対し、一拍子にその小手に打ち乗る術すべてが転であり、狭義に転打ちの名のもとに稽古されるのが、前記の小転、大転というわけである。

小手に打ち乗ることを“合ッ込む”とかの言葉を使っている。この場合、敵の切先はわが身ぎりぎり、または十分に当たるところどちらでもよく、おのれは唯、転打ち（前述の勢い）に相手の小手または手の内に打ち乗るだけである。このとき重要なことは、おのれの人中路（正中線）および腰が充分その打ちおろす太刀先に向かっておらねばならないということである。めくら滅法まっすぐ打ちおろしても勝つことは偶然にはできるものであるが、これはあくまで偶然に転で勝てたというだけであり、本能を去った闘争の情理にのっとったものでなければ「転勝ち」とはいえない。

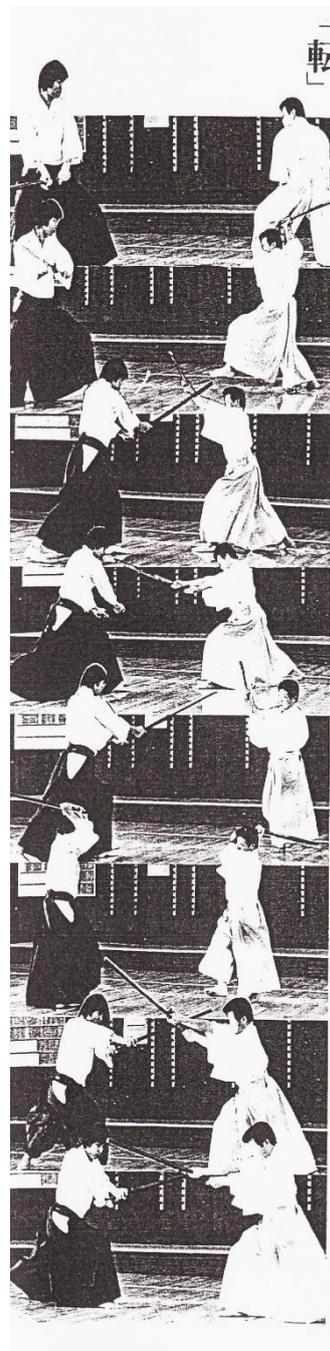
なぜに転勝ちが小手を打ち落とすかといえれば戦国時代の介者剣法（鎧武者の戦場剣法）においては、その防具である鎧を切ることはできず、相手の小手打ち、相手の太刀をたたき落として突き刺すことを主としたわけで、新陰流に限らず、古くは他流でも小手打ちが多かったはずである。これが平服の剣法を使用する時代になっても、そのまま小手打ちが引き継がれたのは、新陰流は“心の先”を取って、術では“後の先”で勝つわけで、相手がおのれを打突せんとする、その小手が一番、我の間合（肉体的）にとって近く、おのれの太刀使いにとっても有利であるところからであり、不殺のためではけっしてない。

たとえ敵が一人でも、また多数であっても、転に変わりはない。ただただ一人ひとりの敵の攻撃に随って、敵の出方に従って対応するのみであり、円の中心点のおのれの存在が球となり、いかなる方角方面に対しても自由自在に転の太刀をおろすわけである。この自分の体勢のいかなるところからでも、まっすぐに一拍子に太刀を出せるということが極意である。すなわち、転とは具体的にはこのような術といえる。

したがって、転は、敵に相対しているときのみならず、いかなるときでも、いかなる方面へも太刀を敵に向かって、まっすぐ打ちおろすことが肝要な太刀である。

また、新陰流に“八箇必勝”という太刀群がある。これは印可の太刀として、一子相伝の極秘の太刀で、これこそ前述した“転勝ち”そのものであり、敵の攻撃を四方八方に想定し、それに対し、おのれはただ一刀を打ちおろすのみで勝ちを制する太刀である。

十年前からこの“転の道”の探求と顕彰をはかっているが、転の字を“まろばし”と読んだ人は皆無であった。武道の世界のみならず、世の中にとって、また、一人の人間の生き方として転の道は多くの哲理を含んでいる。上泉伊勢守の新陰流は武道（剣法）を媒体とした「転哲学」の流れであり、日本のいや世界にとっても偉大なる精神文化の流れであり、いわんやわが国においては、わが国特有の精神文化として世界に誇るに足るものであると確信している。



画像：燕飛（猿廻）

型今昔比較研究

流祖の時代は、もっと腰が低かった

新陰流の刀法は、上泉伊勢守流祖以後、三回にわたる変革期を経て今日に至っている。もちろん今日までその道統が現存する尾州柳生家に伝わる新陰流についてである。

三大変革の第一期は、柳生石舟斎によるものである。整備期であるといえよう。石舟斎は上泉伊勢守より伝授された諸太刀のうち、他流の太刀であった九箇之太刀（九本）を上泉流すなわち新陰流として整備改革するとともに、勝口のみで、太刀（かた）として未整備であった天狗抄、奥之太刀などを太刀（かた）として整備し、稽古に便ならしめた。とくに天狗抄は太刀名をすべて改めている。

第二期は、柳生兵庫・連也親子による介者剣法から平服剣法への変革であり、改革点では最も大きい。

「型」に流れ、理論も個々に異説がとねえられて原典が忘却されてしまったことを憂いて、連也の秘書を開封し、原典を明らかにするとともに、“一打三足”などの新しさを加え、時宜に合う稽古法に変えた。

刀法は生きものであり、その時代時代に適合したものでなくては勝利はおぼつかないという考えによって、前記のような改革がなされたわけであるが仔細な点まで変革としてとらえれば三大改革の数倍にも達する。これは代々の宗師が自分の工夫を加え、刀法を伝えるところから発生しており、その一つひとつを明確にすることは非常に困難なことである。

また、以上のようなことが武道の世界をむづかしいものになっている。通常の稽古においては、一つの標準の太刀(かた)を定めて稽古するわけであるが、これは宗師が代わると異なってしまうたり、指導者によって異なったり、一宗師によっても年代によっても異なる。これはもちろん修行段階における使い方の違いとは異なる。

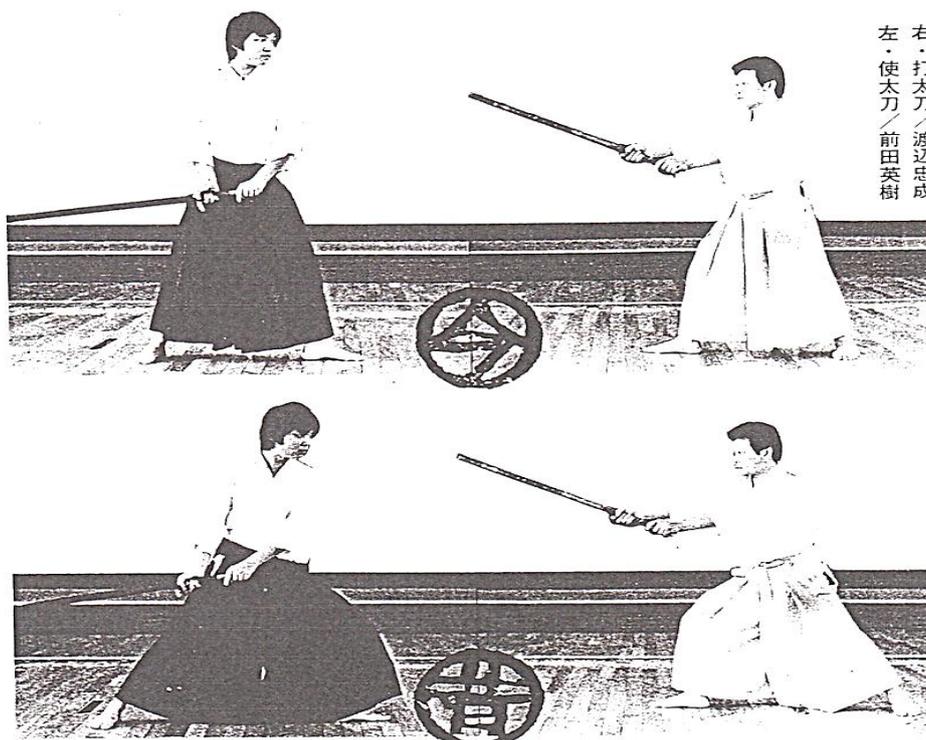
この研究は、幼時より稽古してきた新陰流を標準としているが、前記それぞれの使い方を口伝および口伝書により研究し始めて、その多岐にわたることに驚きと困難さを感じた。とともに、それらが「転」、すなわち上泉伊勢守の“人生に自然性、合理性、変転自在”などと合致しない点が多く存することに対し、疑問を抱き、昔の上泉伊勢守の使い方は果たしてどのようなものであったかと師父にたずねたり、伝書を読んだりして研究していた。その結果、はっきりと上泉伊勢守の刀法を研究しなければ、新陰流総体を理解することができないと悟り、今日、古式の太刀(かた)といわれている刀法を研究の中心におくことにした。刀法が異なれば、もちろん、それに伴って理論も異なるわけである。それを含めた研究ということになる。

今日の新陰流には、古式の太刀(かた)はそのまま伝授されることはなく、個々に口伝、または術伝により伝えられる。口伝、術伝の穴をうめる資料として幸いにも、上泉伊勢守の「影目録(絵入り)」、柳生石舟斎の絵目録(正式には「新陰流兵法目録)」、柳生利方(連也の兄)「討太刀目録」、柳生連也著「新陰流兵法内伝」、長岡桃嶺著「新陰流兵法外伝」などがあり、研究に便である。また、ほとんど変革のなかったといわれる柳生関係伝書(尾州柳生関係の新陰流伝書といったほうが妥当である)がある。

このような研究作業は非常にむずかしいばかりか、その復元となると一層苦難なことではあるが、総じて、現在に比べて「腰が低い」ということと、「折り敷く(座る)」ことが多いという共通点がある。画像の中では、まだまだ充分な低さになっていないが、総体的にイメージを働かせて見てもらいたい。ただ明確な違いは、はっきりわかるよう努めたつもりである。

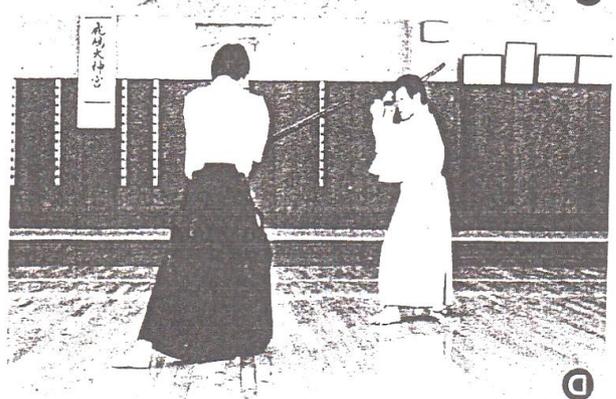
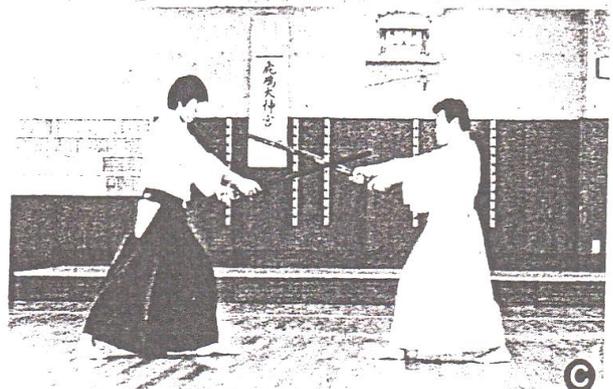
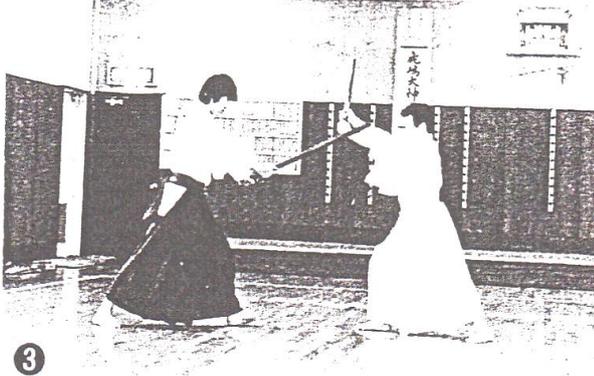
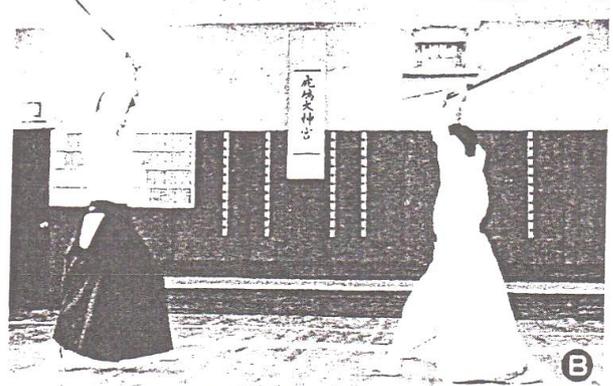
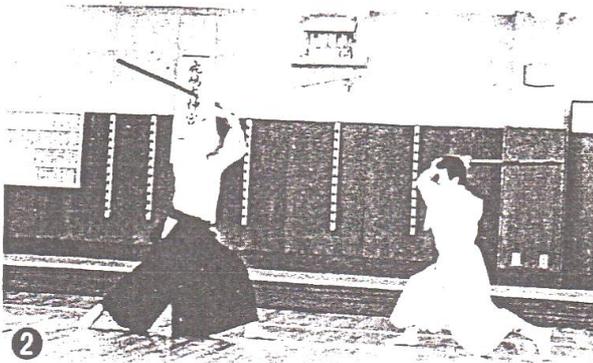
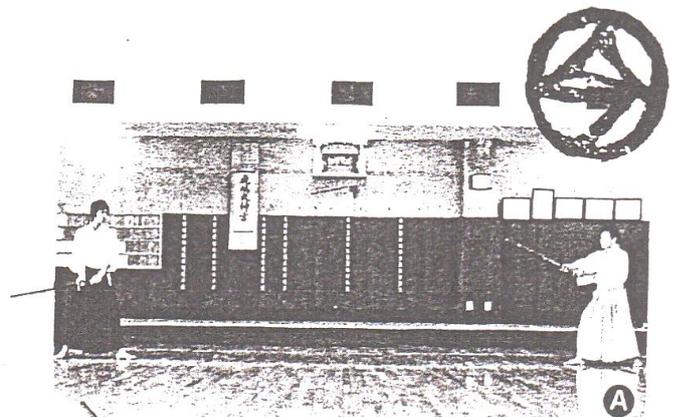
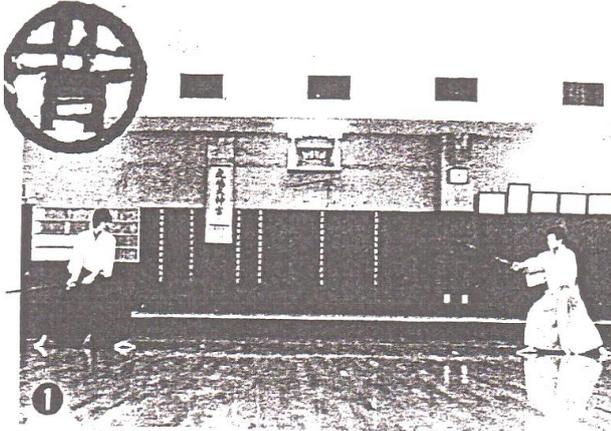
それでは、具体的に上泉伊勢守当時の刀法を、新陰流の最も代表的な「参学円之太刀」により、現在の使い方と対比して述べてみよう。

「今」と「昔」を比べて、その歩幅および腰の高さに大きな差異がみられる。これは以下に述べる太刀すべてに共通である。



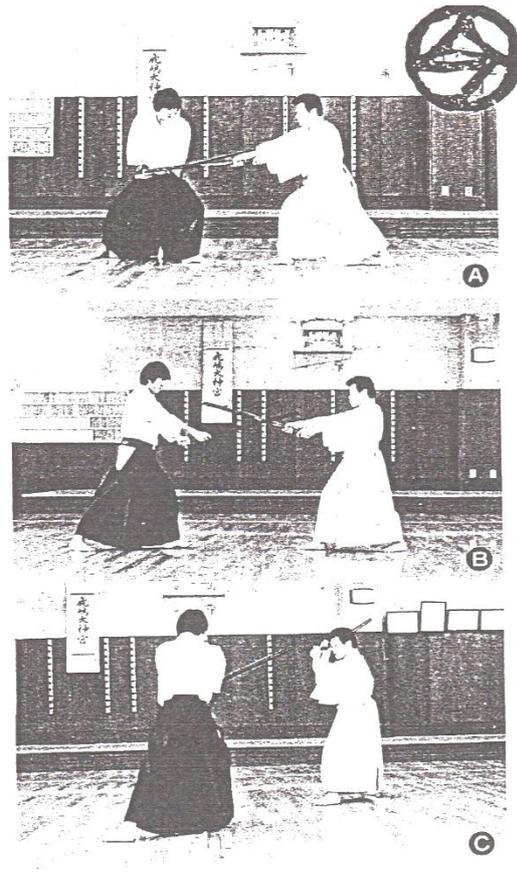
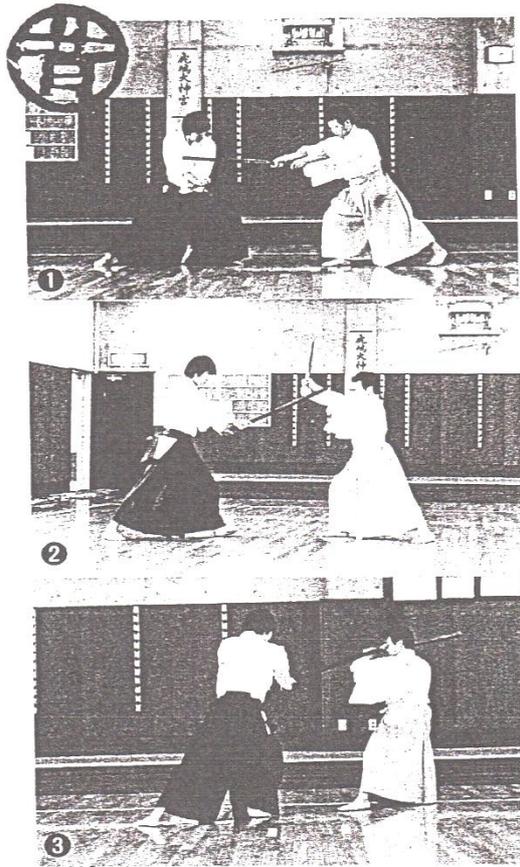
一刀両段

「今」では打太刀、使太刀ともに真っ向う上段(頭上)から打ち込むが、「昔」では、打太刀が肩にかつぎあげて打ち、使太刀も肩から打ち込んでいる。しかも、打太刀の左拳(②→③)にあてているのに対し、「今」は小手の真上である(B→C)。そのあとの位(残心)も、「今」では、打太刀の打たんとする意を截断する(C→D)のに対し、「昔」は、小手打ちにのった太刀によって押しおさめ、そのまま圧倒している(3・4)。この位は次太刀以降も共通である。



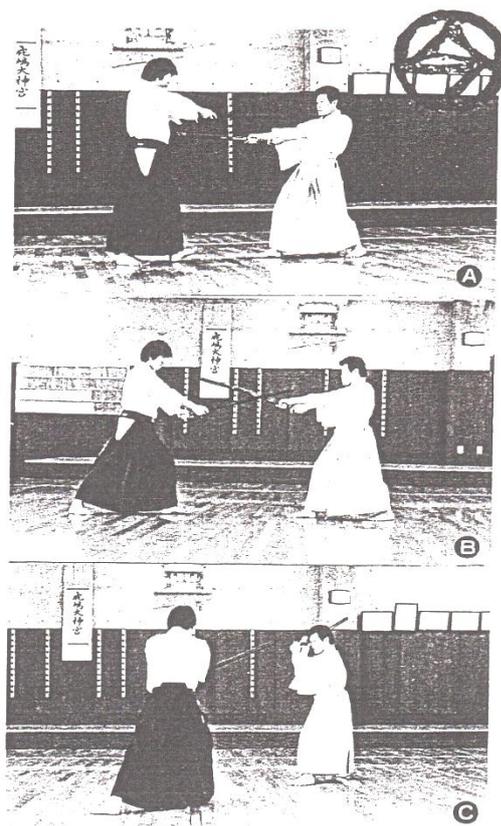
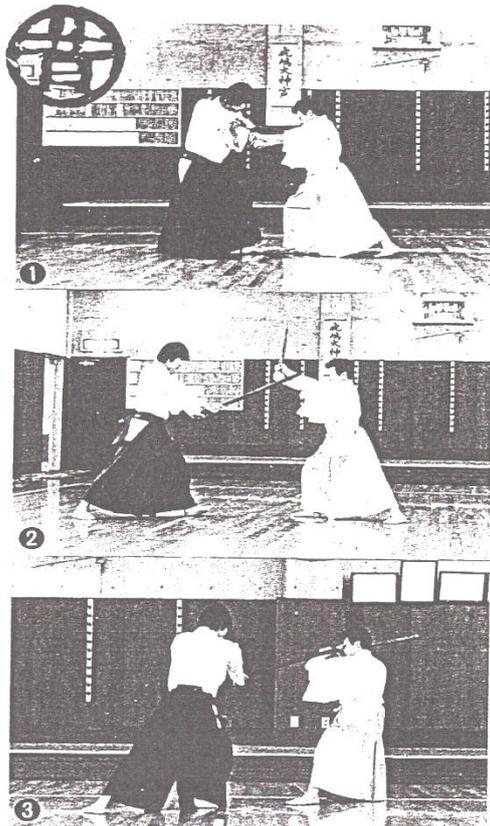
斬釘截鉄

「今」では上からのののに対し、「昔」は左肩から打ちこんでいる。以降は一刀両段と同じである。



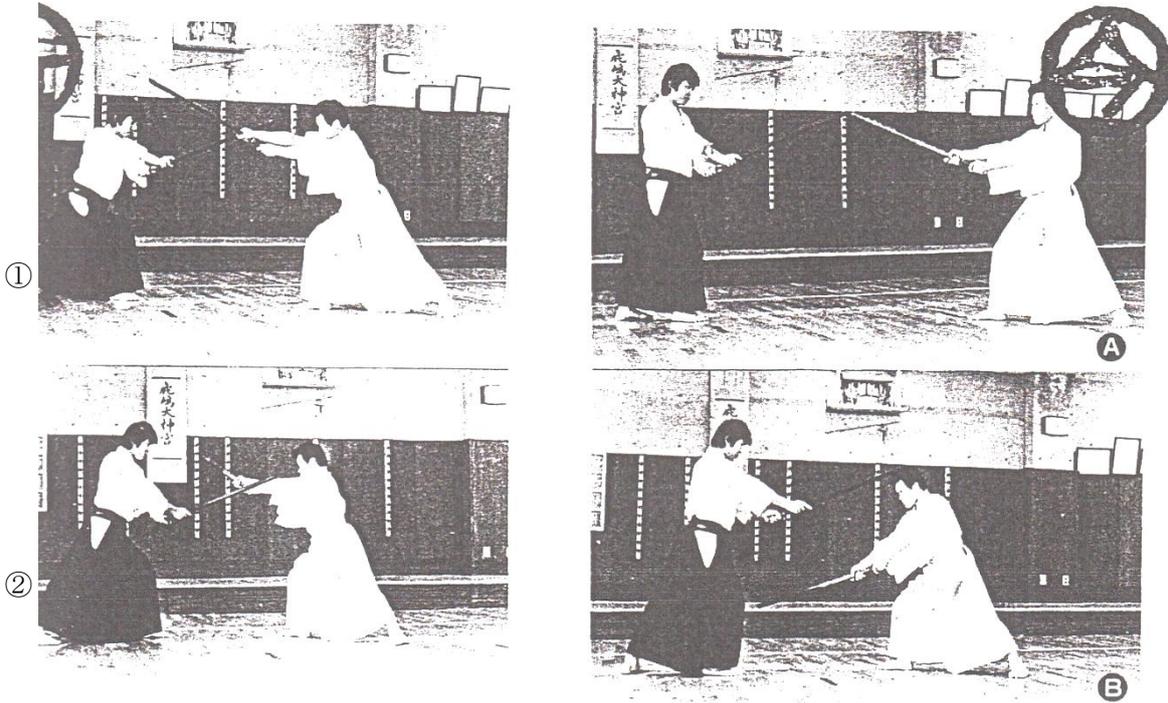
半開半向

「今」では「越し打ち(はずして相手の「のど」に突きこむ一つき越す)となるが、「昔」では相手の両手首に切り込む。以降は一刀両段と同じである。



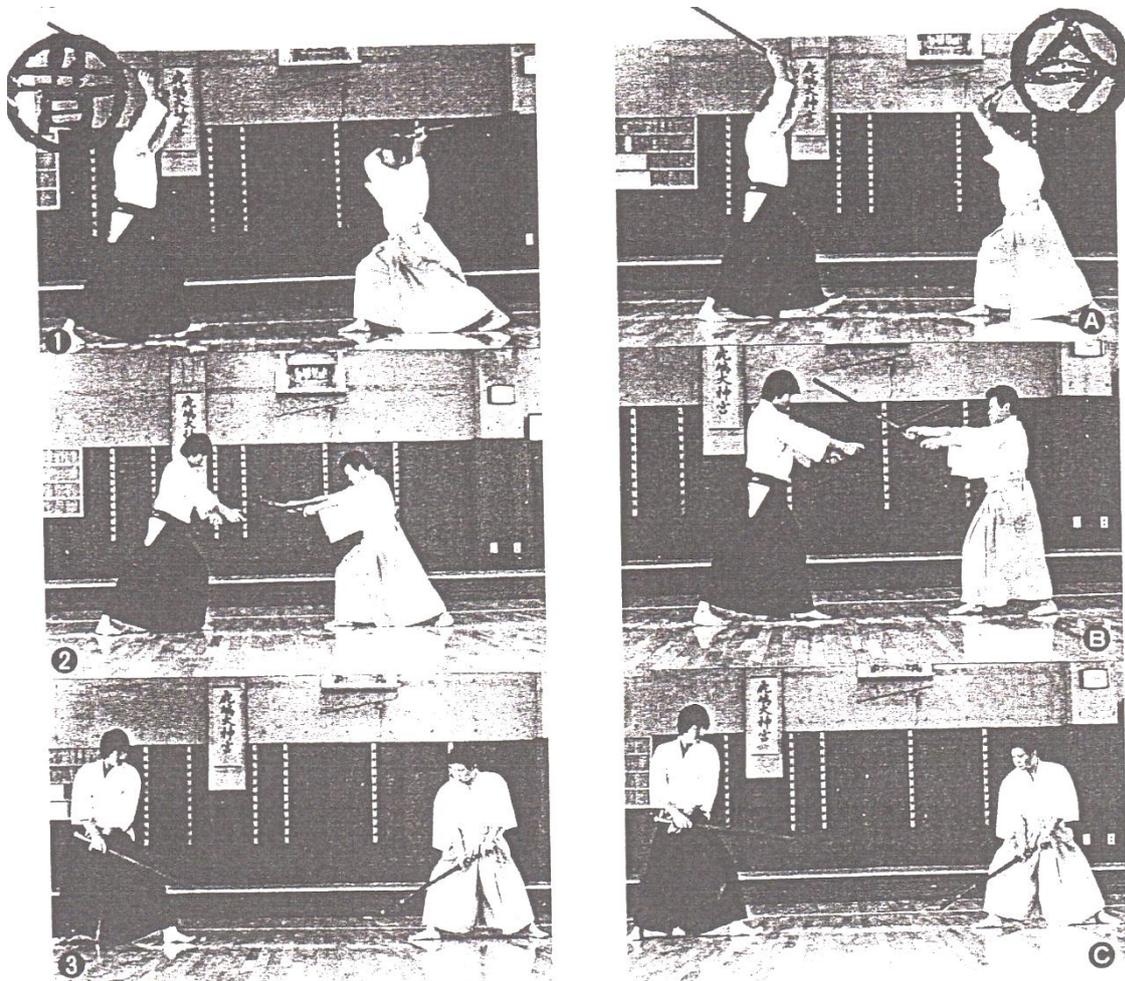
右旋左転(むかしは「右転左転」)

「今」では、相手の切先のウラにつける(右旋)。「昔」では、相手の打ちこみに対し、その右腕に切りつけている。Bと②において、「今」は左拳に打ち込んでくるのをはずして頭上に決める(非転)が、「昔」ではそのまま打太刀の左拳をおさえて勝つ(1・2とも転勝ち)



長短一味

「今」では、打太刀、使太刀とも真っ向うから打つが、「昔」では、打太刀の肩上から、使太刀は真っ向うから打ち込む。



天狗抄

この太刀は、秘太刀として公開されることはない(上泉伊勢守 四百年祭において初公開)。天狗抄の第一「花車」である。「今」では思いきり右足をあげて打太刀の手の中に打ち込む(この動作を3回する)のに対し、「昔」は足をあげずに打っている。

